昭和五年日記

No.

夜光雲 巻四

昭和五年八月

嶺丘耿太郎

No.

密奏君王知入月
喚人相伴洗裾裾

湯原冬美之爲ル
山須丘耿太郎書

No.

目次

湯原書いた歌
A タくれ……一 同
B 南極を……二 同
C ある夜……三 同
その日その日（歌）
A 夜店……四 雜（歌）……廿二
B 日曜……四 未練唱（感傷体）……廿三
C 西川と夜麻雀をする……四 星座連頌（その六）蛇遣及蛇座……廿四
D 本位田とのぢろ……六 朝の月見草（歌）……廿五
E 高石町……七 或る母と子と（短歌）……廿六
F 海と墓と……八 松の蕊（俳句）……廿六
タくれ（その二）……九 こなるゞ（歌）……廿七
古川堤街道……九 唱和（俳句）……廿七
鳳仙花……十一 秋の素描（うた）……廿八
宇陀野のすゝき（詩）……十一 釧陽……廿八
星座（感想）……十二 山……廿九
増田正元 神戸の港……十三 中喜安村服部川千家……卅十
わかれとわかなる涙にぬれて（小曲）……十七 柏原附近石川河原……卅三
星座連頌（その一）於魚座（幻想）……九
（その二）射手座……二十
（その三）龍座……二十
（その四）銀河……廿一
（その五）蝎座……廿一

目次

千塚補遺……世五
残暑……世六
畑の雲（俳句）……世六
ケーテの伊太利紀行（俳句）……世六
夏の朝（感想）……世七
伊太利紀行（その二）……世七
玉田先生に偶の（短歌）……世九
教室の窓から（短歌七首）……世九
野球ゴッコ（短歌九首）……世九
秋の一日（短歌五首）……四十
山風（感想）……四十一
九月二十一日（短歌三十二首）……四十三
九月二十四日（短歌十七首）……四十六
九月二十六日（短歌二首）……四十七
九月二十七日（短歌一首）……四十七
九月二十九日（感想）……四十八
九月三十日（短歌十五首）……四十八
九月一日（短歌二十二首）……四十九
一病室……四十九
二、菊花、野菊花、薄花、萩花、柿花……五十一
一首 西川英夫氏（短歌）……五十一
眠れぬ夜（感想）……五十一
西原直富（短歌十首）……五十二
其他十月六日（感想短歌七首）……五十三
十月七日（感想短歌十首）……五十三
十月八日（短歌五首）……五十四
十月十一日（感唱）……五十五
来る演習（短歌十首）……五十五
思い出（短歌五首）……五十六
十月二十二日（短歌二十九首）……五十七
十月二十六日（短歌二首）……五十九
十月二十九日（短歌三首）……五十九
十月三十日（感想）……六十一
十月一日（短歌九首）（感傷）……六十二

No. 1

湯原にのこした歌

A 夕くれ（五、八、八）

一

夕くれ
声なき犬とつれてる土みち
ひやうり草をひきぬく

二

草の白ほのぬにして
赤んぼ
とんで来るのわかる

三

遠くに見える蓮の花よ
夕くれ雲
だんだんに押しせまる

四

夕雲のはしに
おなのこる光り
大空高き雲を思ふ

五

刈られた稲の稭は秋である

見上げてる

六

村中にのんのんのつら吠く場合で

既に秋である

七

刈りおとされた稲の株は

稭の白、嗅いでる

B南極を（五、八、七）

一

氷山流れさみしい海に

群れ群れて生物

ハレムを作る

二

夏には氷とけて

そこに未来生い鳥巣くう磯

三

南極十字星

これは捕鯨船のエレヂエ富士よりである

四

夕方

海

荒れてくる

捕って来た鯨の腹んあたる波

C ある夜（五、八、八）

一

月梧桐にかかって

西風吹くるぼくは

いろのおるをくらみ（してると思った

二

槐はろはろちるおるは

屋根を歩く白猫の

足音のさびしよ

その日その日

A 夜店（五、八、七）

一すみに赤い鳳仙花の夜店の植木屋

×

おはらどころうまはつて夏休み半ばすぎたころ

×

つめ将棋は大人の童心、
またもむざむざとつめ得ず

B 日曜（五、八、九）

梢おほかた散る空の
雲の高さだ、雷するは

×

遠雷ひびくひるは
庭の樹に蟬来る

×

日えう、父、弟たちを下て山のぼり
雷の音する留守居

C 西川と夜麻雀をする（五、八、一〇）

月夜のうやんうやんと鉦叩いて
お姫らゐる家のそばとほる

×

月の暈ある夜
電柱けふる原の向ふ
シケテも灯いてる

×

ちらちらと月の出
とほのいてゆくさびしさよ、みち

×

夜更ケの電車空ラくて
通ま見える、尾燈のこる

×

月に吼える犬がかなしも
家の中では目覚てるかな

×

すんなりと伸びてる杉の梢に
月の暈かゝる、風なしとおもふ

もとのえがいたな（えとき）

×

女の子ばかりの店、店じまいの埃
土間の[illegible]おくわに掃いてある

×

鳴き出す一匹の犬につられて
なんくと声の遠い犬べうべうと

×

帰れば出わかえにも
青蚊張釣てねるに

×

犬のねる気配外にして
夜更けて月は昇るものか

D. 本位田君と仰ぐら（五、八、一三）

蟬船の外は船艙で化粧すせば
とんとんと梯子を昇ります

×

ネオンとけいと金魚の鱗光
白うのこなの果物ゥ飾窓ん素[illegible]おしろ

×

おとがいのやせも土びしく
やかて、一[illegible]やかておれの青春も消えるのか

E. 高石町（八、一三）

僕らあかし描いた洋館を
今、わ学生が寫生してる

×

寫生してるわ学生のまはらん
子供あつまつてるいるすぢだ

×

洋館のペンキはは半ば剥げた
あゝ友だちと来た噴水も涸たらうか

×

わ学生でわれわれ友の
はじめてまく大人のこゝろ（阿部武雄君）

×

さるすべりの咲くころに
このふるさとを訪ねたことを忘れない

×

幼年時代を埋めてる草原を
食つちまいたい

×

あゝこの亜本路を
ぼくの幼年はかけまはり
して、幾度こうんだことか

×

家々の柿樹はしはみ、二本から秋が深くなるのです
ぼくの心もおちつけよ

海と墓と（八、一四）

花のない書斎の道の果は海である

×

あかしの鳥ひのする聖霊会
こよい墓地に集る群のつゝましさ

×

はまごう焼いた砂山
はまごう焼いた砂山くずれて

胸に虫ゝがある

×

夕くれ（その二）（五、八、一六）

×

野の果のがらくりけむる
その下にうすら光る

×

大鴉、飛び低く田圃におりて
空車ひく馬のゆくゆくれ

×

送電柱の高さを見上げる
ぼくと犬
向ひで小便するおやぢがある

×

隣の畑まで来ては小便する親父
此年のはな

古川堤街道（八、一七）

小屋掛の球場（一高三高戦を見に行く

楡の木蔭のみち

水流れところ

子供ら泳ぎ音てる女の洋傘

×

土手のすゝきの芽ぬ毎に

子供らの水浴み場がある

×

夾竹桃の根本まで水が来て

紅い花のみゞに百姓家

×

青田のつゞき遠[かすむ]

森

みんな聚落である

×

木蔭を出れば又炎天のみち

とぼくわく自轉車の子

×

ひるの市場の土間に西瓜ころがる

子供はかえって大人はひるねする

×

夕方青い河原に牛ねて

山のみゞいよいよ青し

×

丘のむかふの山脈は濃い青色になって

太鼓のおとまだ鳴んでる

鳳仙花（五、八、一五）

鳳仙花はぜる夕べは

みつめると太鼓の音がする

宇陀野のすゝき（五、八、一八）

きみが時々ぼくにひらめかしてゐた細いすゝきといつめたさたも

君の心のたのけさを見たり丸　三郎のことば

大和のくに宇陀の大野に

冬来ればひろらの野面

そよぐはこれ芒（スキ）の柘穂

冬ノ日ノすけれど雨ととのし
芒葉の光り何ぞ銀き

旅人のまなこに浮ぶ虚山
ーそはおきつもの名張の山ーの
雲のいろまた このすゝきの光り

しみじみとさびしければ
夕なゝめして旅宿り
西に入る日を眺むれば
思郷の心耐えがたしとぞ

星座（五、八、一九）

能勢から今津の海岸で西仏を見ながら、このはなし
磯、南に向ッテ立テバ
磯ノ河ノ海ニ入ルトコロ曇ッテル

×

漁船ノ灯、沖ニ一ツアッテ
赤ク星ヨリモハカナシ

×

アガ蝎座、威勢ヨク美イク尾ヲ見ロヨ
毒ノ針ニアノ（ニダ

×

蝎ノ心臓ノアタリ、眞紅ダラウ
恋ノ星ノ感ジガスルネ

×

海豚座、小ッチャナ星座ガ
死ニダ友ヲヨブノ柩ト感ジテイタ

×

人魂ノイロノ淡イ星達、
ムカシノ熱イ心ニ前ヲ愛シタ心ヲオモッテル

×

白鳥座ノ天ノ川ニカケタ橋ダ
今ニモ飛ビサウニモ見エルダロ

彦星、織女トミエナ昔ノ人達ダ
ソレナ時代ハモウ過ギメサウダガ

×

W字形ノカレオペイア、北極星ヲ中心ニシテ
北斗七星ト天秤ニナッテルノダ

×

ケエ、プラビ、アノ蛇遣ヒト蛇座ヲ
暑イ夏ノ夜ノ感ジソノママカロウ

×

射手座ノ方ノ上ニカヾンテンーン
木星カラウカ土星カラウカ

×

射手ノ星ノアタリデアマノ川ノ消エル
今夜ハ曇ッテ紀州ノ山モ見エナイ

×

アノ天ノ川ヲ天ノ望遠鏡デ見ルト
誠カッテビックリスルセ、人間ヲ小ク思ヒタクスヨ

×

ソレガ皆星ナノダ、雲ノヤウニ見エルガ
何カカ宇宙ノ大カ オレヤワカッテ来ル、

×

摩耶ノケーブルノ灯、芦屋園ノ灯
アレラモ星座カ、

×

雲カウズラ出テ来タ
神戸ノ港ノ明白ノ行カウ

×

僕ノ自分ノ感傷カ天ニ上ッテ
星ニナルコトヲ望ンデル

×

増田正元、神戸ノ港（五、八、二〇）
ラヂオノ野球放送聞カシテ患者達
楠森ノ本丸陣ノ青さに

×

日向ヒるてきみも青いと思ふ
鉢伏山の急傾斜の見える花園

×

僕たちの云う言葉が愚者らを焦燥ないかしらん

×

君もトロオ・クレーゲンをよんだという
トニオをやはり自分と思ったいらしかも

×

夕方病院を出て自由な気持になる
坂をみけ出す

×

静かな海に名ーん[illegible]入ってゆく
いつになったらうきみと逢ってよ、ー

× × ×

何とはしらぬあこがれたこの波止場へ来た
この外国船の名、なんて、を忘れまいと思ってる

×

船側から水が落ちてる
人のこえが上ってする。外国船

×

灯をめぐる灯。沖の方には暗い
灯をうごかしてラッパが来る

×

ラッパの心音なんく高く
この窓辺に来て曲る

×

黙って魚を釣ってる人。
暗い海は魚で一杯となってる

×

あゝわれいつの日か魚となりて
蒼海の底 日の目なきところに
蒼白のかなかなこたへまし
わが情こしつんとまりてあらむところと

×

きみを思へば洋のもゆん立てる
煙台のさみしきこころたえかたし
海よせ来る、鷗来るとも永久の契のかたきかな
明日は他なる仇しごころ

わがとわかなる
なみなんなれて

[illegible]さん（なぜかに何をいのちとなから（む

×

月よの海には奥深の上に深び
吐息つきて[illegible]なき歌をうたあ

古[illegible]の夜は寂しい沈みて
昨夜の歌のほころびつくらあかも

×

船動き出[illegible]鶏とび立ち
テープは切れむ
まややまのケーブルのぶら下りも
やがては見えじ
神戸のみなと白き[illegible]
今ははなれむ
そこおも（ぼ）旅ごころ おこりて止まず
旅立ちの日よ いつかまくらむ

八月二三日
羽田住田君
上段急ニ合ス
吉延君、蛇口
君各村君ノ
合ツ、今津ニ
ツク

星座連頌（その一）旗魚座

古都の海に多くの白き波竪立ち
海の魚一つ一つとび立ち
南の旗魚星座となる

灰かな相ひ出の[illegible]人[illegible]
流流すれば碎けて散るは
磯波の間の夜光虫よ

ひとのかたちと、夜と共に磯波の間の
夜光虫動き増し
運命の星餓まれて
行くはあなさや

今、夜はあかく、磯に風おちて
三角帆の船静かに港に入る
一人のあぬ、火なき孤独の舟よ

ともづなはひとつ一つに下りて
椰子の根にからみつき
船出船底より這い出る音の[illegible]
あ、星宮も迴廊をゆるめ[illegible]この一時を（23th August）

星座連頌（その二）射手座

はてしなき一すぢの道さびしくて行けば
いつかわれひとごとすら孤園の一人となりて
天空の音楽を聽かんとのあこがれおこる

かゝるとき空の一すみに雲立ちて
たちまちにして空をおほふすさまじさ
胸も暗く道もくらし この並木路を

やゝにして雲晴れたるとき光つ目入るは
光黄いろき土星やゝ低き射手座の
巨星の聖なるいろ、凡人のあまらめに
恍惚と視覚を働かせし (23rd August)

星座連頌（その三）龍座

北山の松の木の間より雲は起りて
稲光り、雨はいまわら来る
あゝ、龍星座、いづこにかあらめ (23rd August 1920)

星座連頌（その四）銀河

秋立てばぽつぽつる稍ゆんしるく風わたり
天の川みなみに流るるもさやけし
七夕の笹葉に朽ちて古き人の恋
そぞろにかなしとおもふ
こよい星のいろ殊に織女を増し
牽牛河を渡りあり
かの項長き白鳥翼光りて伸びたり
わが胸の中に空が長く鳴きて
飛びゆくものあり、銀河をおほふこと思し

星座連頌（その五）蝎座

愛しみて南なるかの赤き星神秘い美
おんみがつまもて子、かなならぬわたくしの
このごろの空の美しさにかの好き心おこりてはをりまをさぬ
まことにおそれ多きことながらわたくしの
ひとりの乙女にこいこがれてございまする
かのくろきひとみとしろきくちびはよごとよびとの
ゆめにかよいきていもえさせまをさぬ

八月廿四日
無題

わたくしの浜にいでまをしておんみに祈り申すことすでにいくにち。このこころひとつにも離れ申さず。あまつさへまことに申すもおそれおほきことながらおんみが養屋の一切なるかごとき眞珠の玉のおぐらすらのをとめのために勢ひ望いたす。よるはよる、ひるはまたわたる秋風に安きこころもあら申さぬ。まぬずれのおとやさやとしてにほひおきなみのひとくるかと思へばはや遠くの木にある風の奴めらわたくしめが惜しみの的にてこそ[illegible]せめてよからともいわたしめたまへ。忘れさせたまへ。まつたたつてのそにはかのをとめわかものにせさせたまへとおろかなる、わたくしめいのちかけておろがみまつる

(23 August 1930)

雜(五、八、廿四)

遠い磯の海水浴場に　無花果に日くれて
波寄る見える午後　家陰に女の行水ある

×

夕くれて船を出て行き　砂浜ののはら蟋蟀もに
防波堤に砕ける波のしぶき　ぱたぱたと子供追ひかんとする
止まる

×

病院の塔にあらつき　工場にモーターの唸りの音
ひつと見つめて時の過ぎるのも　大煙突をめぐる鳥がある

×

泥臭い血りに硫酸積んだ　建物と建物の作る陰影
舟の底がつかつてる　職工ら見えぬ工場の運搬のおと

(五、八、廿三)

電燈點くころ　六甲山の峰々くつきりと
白さるすべりの遠目　風を案ずる洗物干台に置る

×

山の頂に雲おそひ来て　夕方煙を吐く煙突ある
海の苦楽園の灯二つ三つ　工場のどんまり

未練唱　×　×　×　×

浜の砂に残るものもなくて　此の砂浜に残るものもなくて
孩にや人影さうはらと　あ、此の夏もゆくの

あの子のあげは見えもせで　未練に泳ぐ人々の肌も吹くかや
沖の煙吐くおしやの　秋の風は空の蒼より来て
さうさうと遠くの山脈に衝りに
行つてしまふ(25th August, 1930)

×　×　×　×　×

星座連句（その六）蛇遣座及蛇座

大いなる安牛田雑樹のもと
夜深まに焚火もやして
人集る。と見れば失に蛇遣い
笛の音はひりやら、ひょろと
哀なる蛇を踊れる傍につれて
集れる群の中「怖しと叫ぶ童あり
蛇の眼は人うそこに向へる
二又の舌にうつれる焚火のいろ
しみじみと哀しと思ひに傍の者上みて
安牛羅果はなると蛇の上に落ちめる（27th August）

星座連句（その七）かしおぺいあ座

かしおぺあ姫の椅子こそ
珍しきもの、ねのちゑ
酒女婦博の三つの要業
浄土の女のみ椅子はえそ相応はしからず
悲しみ、喜びの感情の表情は

朝の月見草（五、八、三〇）

摘んだ月見草に朝の露ある渡へ行く道

×

曇り波の上を帆並べて来る
船の帆の濁りいろ

×

うねり波来る海に泳いで
沖のあらしを思ふ

×

瘤を水につけて、うねり波
乗って山辺へ泳いで来る

×

溝へおちかけてるトラックを
囲んで皆見てゐる

×

庭園のるこ〜さうの朱花
蔓を引いて切って来る

×

或る母と子と（五、九、一）

嫁ぎに行く父より遠く離るゝを二のごろの母の責め言葉となれる
病み伏して神経のさわりいよゝ増せる母ゝことばは肉に耐へえず
怠け者のわれのなまけをいかに母の言にくしみこもれるこゝろもあ
愛情の何たるかを知らずいたずらに子どもを責むる母のつれなき
怠け者のいたずらつゝめなせることを更に責められておこる反抗の心
階級暴露の歌はあれども愛情暴露の歌のなきこそいかかなれ
何もかも楽しくばあらず此のいくしき母と子どもものたゝかいなりしかもつば
事毎にいかむ母をば心底憎の母んあらざるなと子らもいかむ
朝ん出てゆんかつる父上の事の様しらずたゞに子を責む
ある時は家をもゆんと思ひしか今ぞ耐へてすまむとぞ思ふ
妹のなやらしからぬねじけ心つくづく見れば母にくみぬ
われが身のねじけ心もかくしかたしなる時はみをせの或時は母を責む
母の比責もだたえずて妹の論ふこゝろはわれを病ましむ

松の葉（五、九、二）

松の葉は松のにほひすか（ではいかに。
おさなごのおさなごこゝろやとまとの實。
いちじくの葉かげになりて秋づきぬ。

せみ死にて幾日のひかり過すところ。
きゝすうすおもかつし夏の家。
海のおとうみをはなれてきくこゝろ。
山すそのほのかにはなれてきくこゝろ。
頂は朝を過ぎしと下るひと。
小流に水涸れて魚ゐるとりけり。
桑つみて秋蠶飼ふしるしのもと。
柿棟の二番咲きなる秋の空。
夕鴉まの松にゐて啼かずけり。
遠島へ流刑消え行き海のおと。
雷雲もいまは動かず山のそら。

こほろぎ（五、九、三）

こほろぎ鳴いてる落葉の城
静寂する。

ある唱と和（五、九、三）

唱　おさし野の宿の湯に入り貸し浴衣旅のこゝろ胸にこみあく
出すたく、庭のしげみのかなたより静かにもるゝ三味のこゝろ
とう島も唐津の海にゆめむすび五を送らし舟もゆらめ

和

三味の絲いまさかしとまいをびかり
借り衣のかりのにほひぞなつかしき
ゆうくれはなみをこめかる稲妻哉

唱

島一つ又一つ出る瀬戸の海
櫻葉のはやいろつけり夏のくれ
初盆や煙籠かゝし段の川

和

浪くれて陸(おか)のまがめ(や)星ひとつ
けいとうは出にくれて夏のくれ
煙の籠の川の上なるひとひかり

秋の素描

鈍陽(五、九、五)

壁に立す光のかたちまに
虫が鳴いてる

×

陽元畑の下に芽の畝
風にゆれる芽の葉、青さ。

×

日は傾いて——
東空に月、大きく、うすく、
高架の汽車の外あり

× ×

山(五、九、六)

山の壁のあのさいちゅうしく
みどりん見えるてはないのとほくの山が。

×

墓石多く墓地に
光を射し下り日は傾くも

×

陣の男泳ぐ者が寄いと思はせる
秋の川、川上の山のいろ

×

遠くはなれたねもなつかしや
休暇あけの秋のこころ

×

草のひた休暇あけの日のグラウンド

三三伍伍の生徒のかたまり

×

夏のまの熱情はどこへ行ったか
ほそい風の脚が軽快に街を

×

夜、芝居小屋の旗風にあらされて
空のくらさよ、星がある

×

人々は足を早めてあるくも
秋のかぜ、緑のネオンせくしがある

×

早くもほくは
柿の実る法隆寺への道を思はされた。

中宮寺観音菩薩
雖頸と日々草の花畑
居らぬとんぼの飛ぶ姿も見えて

×

片岡の塚平坦さて、蜜柑畑

青みかんみのり日あたりの一

×

塚の開口の広がりねて
四旦ん人ゐぬをさびしかった

×

墓穴の蓋石の上に立てば
風通しよく煙草のけむりなびくよ

×

口を開いた塚二本で立つてある
奥にころがつてるわるをしみじみ見た

×

蜜柑のあいまに植の木
実つて赤と紫、ホウトウ(いくらも)つめこむ童心。

×

線路を造る工事大分すゝみ
とろこを押す鮮人を叱る人間来る

×

日の中のわきみちに

玉虫色の布織つてる田舎の女

×

蜜柑畑の低飛んころがつてる花は
腐りたものゝ匂ひがする

×

塚の上半分開拓かれず
雑木茂つてるもある

×

塚どころへ行くみちの藪の
蕾固く虫が鳴いてる

×

雑草に言葉もかけられず、ふら
泣き出したような心地で石ころみちのぼつてる

×

水の匂するとおもふと
堤の上は、池があつた

×

汚い池おちでものあらふ女

道をそこへ行くとき上つて来た

×

道ばたのころみちで、石ころの
丸くなつた角が無情に光る

柏原附近石川河原（五、九、七）

葡萄畑の間のみちをゆくうちに
日はかたむいてゐつた

×

葡萄園もゆゝぐれて
人々は帰るらし

×

川上の二上山の山陰
静もりゆくゆく方が来た

×

川波の音がすゝ夕日のうから
すべなくあかく川下に女がゐる

×

ここに情いきどほろしく

石を投げては投げてゐる

×

川堤の草プラが赤く染ったいとき
夜のかくし能はずなった

×

金剛山、葛城山、また紀伊見峠と
わたしは抑へきれない熱情をもつ

×

広い河原をうねって川の流れてゆくところ
堤に牛がゐる

×

川原の白い石しまきて
かはせみがゐる

×

川原のよもぎなつかしく
焼いすわって煙草をのむ

×

動物園の人が私の坐ってる前を

一尾つり上げた

×

あゝあの紫色の鉱物には
詩魂の觸手がある

×

河上の橋のひかり
かちわたる人のなかへ、みだす

×

千塚補遺

金色の花の畑遠くかいやって
さびしいとりの道である

×

夾竹桃咲く塀をぬけると、
稲田広く、野を遠に水色の山

×

だんだん畑の畦高く
白い犬まで眺めてゐる

×

塚の角室にそもじ丸をおもひ—
口に生い下る葛の蔓のまみわるさ

殘暑（五、九、十一）

秋ひとと名のみの殘暑ん
鳴く虫のこゑ

×

埃肌ん（とつく暑さの中を
ぺえんのつて帰つて来る

×

雲の名を覚えおの戯れら
夕づく日えん飲ん暑く

畑の雲（五、九、十二）

秋づくや茄子すかれし畑の雲
秋立つといへども島のわかさよ
負ふた子をおひして通る馬の側

Goethe: Italienische Reise（その一）（五、九、十二）

秋立つや南へ下る旅のきら
あるさとん似たる河辺の街の鐘（Regensburg）

行先の空を眺めて旅やどり（München）

九月の朝（五、九、十二 夜）

あ、縷紅草の朱の花に西路染ム
柿擽の音もしるあしたは
口笛も軽く吹きたして川辺を行けば
小子校へ行く楽しみ油然と胸んあるよ。

女の児の水兵服もまつ白に
おつそさしたお下げの髪のやはらかさ—
子供の秘密な恋心せもすべ知らず
犬を前めんの心もちて校門をくぐる。

高石小学校同窓生ん書贈る。

伊太利亜紀行（その二、五、九、十三）

山人の絮を着飾るあはれさよ（Brenner ≈ Tirol）
国境峠となりて朝明くる
イタリアへ車入らむとすトンネル
石灰岩山安けはしさはさまみち

月かげも洩れぬ木蔭や水車小屋（Vom Bremen bis Trient）

月ゆふよるの音なる水車かな

果実賣る婦来るあたり葡萄山

見の（4ばすもし峽におこる雲

今私はじめて伊太利語はなす御者を傭った

宿屋の亭主も独て話さない。だから私は話す術を

知らねばならぬ。憂する国語が使用語となる

私はどんなんとんだことだらう。（Roveredoにて）

橄欖と無花果を見る伊太利亜に（GARDA湖）

山石山間のぼりて見るや秋の湖

湖岸ん遠く見る屋根

タくれや街のゆめきん旅ごころ（VERONA）

アジェマラアの鏡ならむとき時雨来る

葡萄漕す挿穂を車ながめ（VICENZA）

朝露や葡萄畑の鍬のおと

南面となりて葡萄のみのり深し

葡萄山ついくたりや馬車ん眠る（PADUA）

果樹園の中ん村寺の塔

見返（れば越え来し山や雪ん

ある丈や雪ん堤れむ山の彼方

行先は麦畑見え初めのエニスなる（VENEDIG）

南ん見えむ山見え来たる

私の来らの匂ひ（ゲーテ自身の見聞）は決して無いん言

私のあみなし式の通漕は決して左れのみは匂ん何ん

喜ばしないなん。ゲーテんは此ら私るを、思ふが

玉田先生（五、九、十六）ん偶ゐ

生徒われ気の着かむし先生んわかるを呼ばれおどろん外ら

小学校六年の時ん似もつぬと思へる顔（人知らたまゐ

先生の夏帽のかよこれ国にしるく云気も喜（たま（ると思ゐ

先生ん報るる時はまだ直し壮からしいとも去れたまゐ外ら

先生ん学校を去でいまだ会はぬ右を注るもさびしと思いて

ここで中そろって此の先生ん此ら私し日を思いみる壮るる先生

先生のお嬢さもも外ん女学校ならむ家を探ん来とのたまゐ

教室の窓から（五、九、十七）

三階の教室んゐて窓を聽く下の野原ん鳴き充てるらし

いつ、なく講義主をゐる味気なさ主三さむし出聞えくるのし

雨あとの山のはざまより雲の片ちぎれて空にのぼりやまずも

金剛より和泉山脈にかけしつる平たき雲は山を放れぬ

紀見峠の内の国の紀伊の国雲いでみるて雨ふれるとなつひとあもいしことをはかなしと他国にかこる雲を見てをり

二十の男にあれば花みな意ところにとつにおもいてもあらな

おもいでの夏の名残と夾竹桃ちまた若しんの二るさみしさ

いや日にけに朝のつゆけさまさるなり月草の花咲くころとなる

野球うつくマチ第一回戦理三ん負ける三A対二（九、十九）

秋空にヒット飛ばしたあとあらためしめ思いるたれど三振したり

まつすぐんのびてゆくあたら想ひみて人ア三振をして帰り来る

はじめのカーヴ見のがして球振り直球見のがして三振となる

× 友眞実を指

痛み疼く君が手をへるたるとき部分時計なりんゲラ刷や

血塗（し[illegible]）示指（ひとさしゆび）の十ケ目より白き隙見ゆるを一目見ちり

秋の夜、書、朝（五、九、二〇）

垣内（かきうち）にはいとみち鳴きて夜ふかし稲のこずえに星かがやきて

隣屋の障子明るく灯かげてうち眠るらし夜は更ちつ

×

屋べのけやきの垣内のねむし長き朝流れて

学校へ行かずに俺の影長しのぎんがらん朝つゆはあり

×

つゆ草いなびてるみてとびてゐる草ゐら中にあたまうあもち

ちぢこまる雲のかたまり流れゆき流れてのちは何もなかりける

×

街の灯は一直線につらなりて市電走るもここより見れ

まつくらの屋根の国まり（まるところ）空にに星かがやくも

擂鉢中の水鳥どもは眠らん人らべて千、宝し眠人ひとり残たり

あ、なつの九月あらめや下界の二の世なるカフエにジャズの音立る

いつの日か破壊は来らん下の市街のあかりのもしかるらんなり

あのあらの九月か他なる男らんとつかまとき九月は注かむらむ

× × ×

山風来る九月

あい山風来らむとき

九月蒼い立ちて山岳かむ

山風の力あらて

破壊の術行はむ

白亜の家もくだかむ
藝術の殿堂も消さむ

思へば嵐のすぐる後
一種の残骸ものこさいるべし

山風すさまじ
清き虚しき野に起る
口笛吹かむ　新しき興奮と

ひいきん高じ　そこより　ここより
新しき物語り
新しき材集り来り
盛り上り　組み合い
而して有機的　即ち正義より

こんにち又何らかの不遇を思ふ
破壊の嵐起さむ
破壊の嵐来らしめむ
[illegible]　山風　山ことは神長津彦
猛き神　いみじき神　田力士びすと吹く神
とことはに破壊を行い
とことはにものいはずもむ
跪け　礼拝せよ　そこなるけだもの　ちりあくたの子

九月二十一日

午後一時頃　大乳駅下車　歩いて立田道を行く
埃みちわかゆきし時　白い花　小さなけれども　菊とは知れり
聖上村書各　金の彦神社
溜池の水干上りし土の上に　雑草をべるが　白く光る
み社のかたへのみすやのほりゆき　葡萄畑　車下り来る

聖上村厩戸屋畑金の姫神社

万葉人のよいしみちの立田路トマト作らむと誰か知るらし

山畑のだんだん畑の上と下　話すを聞けば人死んしこと

山峡の年はたけたり死んし人の丈夫なりしを語りあるかも

奈良縣生駒郡三郷村立野　官幣大社龍田神社

山みちのひとりたびしを帰り角柿の安堵するをぬすみくらいしか

山みちをのぼりくだりて疲けどと目ん泊りくる大和國原

果樹畑のあいまのみちのまがりみちひとひとり行きかへりつつめるも

三山はつばらん見えて低くかけり吉野の山雲はひをみゐる

立田山くだりて行けば牛の群家毎に乾す村に来りし

牛の群新かれ干すとなまなまし家中んして鼻緒とるも

法隆寺

おぼはしくくもれる空か祝鳩の寺の瓦屋に鶏下り来る

あらきの九輪の空はもりしづみいつこんひをみ啼ける鳥かも

金堂の法佛尊し

古代の喜びしをかもよ二木のみ佛おほろかんして思うたまはず

薬師佛のわ鼻ひらきしおん教のおほどかしていかなるとし

釈迦佛の天蓋みますえんの望ひとは涙の聞まけあ

伽陵頻河来鳴かむときはいつのとき天人のいぢもまこえこぬかも

ひんづらん絵ひしえんもおほけりあしの子供おもはゆるかに

二木のみ堂ならびぬませるみ佛うものこはとぬん涙なかれき

五重塔内の塑像を愛しむ

[redacted]

涅槃んつどいて泣けし阿羅漢の泣きゐる口は寂かしかも

思ひものもまうて泣きし涅槃の場　像のなまかは真ともろ(ず

釈尊の最後のみ姿へ安くる人ともしきろもみ手いかつ

いつしんん口を開きて泣くらのん　らのんかの口は高うかくん

夢殿

法隆寺の御母陵の塀中の柿は未だしあまたみのりつ、

ひとりをばわれもちおしと思ひしか　女子生徒の遠足の列

夢殿のお寺の奥のくまんじゆさげ抵抗しおもんやたれ

夢殿の立角堂や何もなしまはうまはめてしと思いけり

ことさらん死人さひしけ門二所の芝ん生るしあば汽車にあくれけり

法隆寺駅へ

駅上の山のくぼみんはうて大和の稲田ん一いまだ光あり

ゆうつまて土ふと身ん上しも次ん来ん汽車つくまでんまだ早はもある

一汽車をおくれしぬん法隆寺のみねを走りけりまけおしみんあらじか

飛鳥時代

金堂ー薬師如来（銅）釈迦三尊（銅）四天王（木）
観音（木）天人。鳳凰（中・内及西角天蓋）（木）
観音（玉虫厨子）（銅）

夢殿ー救世観音（木）日光、月光（木）観音勢至（木）
文殊普賢（土）二脇如意輪像（銅）釈迦三尊（石
照像）（銅）阿弥陀仏（銅）四天王（木）十観音像（銅）

奈良時代　前期

金堂ー橘夫人念持仏阿弥陀三尊（銅）
東院絵殿ー夢違観音（銅）

中期

五重塔ー塔内塑像（塑）
夢殿ー行信像（乾漆）
食堂ー日光、月光（塑）四天王（塑）
東院伝法堂ー薬師三尊（乾漆）
西円堂ー薬師如来（乾漆）
九面観音（木）薬師三尊（乾漆）阿弥陀三尊（銅版
釈迦）薬師如来（銅）

釈迦
大元帥明王

金堂
梵天
五大力明王
大日如来
釈迦
梵天
帝釈

九月二十四日

此の秋はじめてのいい天気。朝起きて吸ふ空気のまたさ
十一時吹家を出て保田君と二（
二のみちを泣きつゝ小木の行きしことわが忘れなば誰か知るらむ
秋立ち柘榴をわりておいてある実はいま赤を出でたり
柘榴はじる指の白さよ止遠の美さよ

秋篠寺

秋篠のお寺の門を入りたれば汗かきましてゆれはこいたり
伎芸天たゝかおこりくる喜びんおはす首ひかしげたまひ
五大力明王といい、怒相たけなはにして眼ようたり
あましのゝお寺の釈迦小木は見まくらまみ屋よんみましけらずや
おん釈迦は念想のすがた、ものぐらんひかる光を見んけり
ムチ左はのまつりまみ脇ほの見えたりくるとまた扉をあけてくれたり
帝釈のおん屋ちかくとはみかど南の島も思はゆるかも

神功皇后陵　法華寺

丘合のまがり道でをゆくころん日は沈みゆく山のはを見き
昴波珠　禅三昧　海龍王の名をかなしみと　来しみてらん何もなければいもじ・うなり

法華寺

金堂のくらきなかに何もなしとまみがいければ木仏のそのみず

このみちや陵のまの曲りみち葉みな花久ず赤らにけり

海龍王寺

海龍王寺の鎮地のめるびいしおいて瓦しんけるよひと来ぬ来れば

不退寺

夕くれて稲葉の青き身に浮き不退寺の屋根は見えてゐるかも

不退寺の御堂修繕ん、庭せまく白菊咲くをみてをみんけり

一本城宮址

奈良にて晩餐 公園を歩く

九月二十六日　歌会から友達と二人

金々ん世を会いゐる来ば女のうたは作らざりけり

をとめ子の世んゐる空ん山水が美したゐしと思ゐんあくるや

九月二十七日　浪曲とラグビー　多一。夕晴

西原直蔵ん会あ

はな木ゐてこひゐしとしとあひちゐは

かたりつゝおもんゐぼりくるえみもせんを

九月二十九日

ーゲーテを想ふー

伊太利更への道は

暗くまりでしゐつてゐた

闇の中に葡萄かみのつてゐたが

とるべくもないものだった

時々閃光を発して馬車が

木ちかつてゐ行ったとき

道の両側の家角が

奇怪な相貌を示した

私はとぼくよみ作ら

あこの木のヴェニス、ローマ、ミラノの

幽壊を夢みてゐた

九月三十日　早朝や事ちり長瀬市ち撮影所ち金蓮

星空を見ゐ午前の二時ならしほのぼるたかさを見たら

おんおんもしろくすこしもりけりあらたなびく空の片すみに

南んあをほのぼのなびく方黒き力強をいたゐゆんけり

前をゆくひとの走るん走ったりいまゐるとく来ばをのくも点みめ

あまぬの天ぷ沖の空を見たるときわれが野性の血は湧まんけり
土かべを村の一めんをまりの黒屋根の内ゆのぼる火ん走りたり
あみだ仏(わ王ん)けるのも大空ん あま煙の立つのぼる見れば
あちやと思ふん黒煙空心より吹き出しぬこの棟んも早やかは迫るか
何もなきと思ふ棟も空白はあまほのぼのひたくるあとあ
破壊のひびき来るをしかと感じあまぬを見てゐたりけり
大空ん高き煙をうちめぐり鳩の番はおどろきてべり
鳥どもの夜目や利かぬかこのほのぼるん明るくはえて止まざれば
火の勢もやゝおちつきぬと思ふとき消火ホースの水はちかんり
もゆるもの何もなくなりて火はゆるみぬ泣きつゝ女優帰りけるかも
半焼の棟んおしみける水の音消し止めばとて何かあらぬは

増田ある其他（九、三〇）

僕の祖父は義ばつぶん法はまち何等利益の分の祝を受けず
せる人間をば能力嫌なしく思ふまでん考僕はこの
ことを此のかうのやうん厚みある秋の空の下ん感じ何とも
知れぬ涙をとめることが出来なかった　そのうた

一、病室

壁ニ這フ蔦ノ紅キヲ愛デキワワソフ四トキ時ヲ過シツ

散歩ん キミ ノ首ヲ ホツレト 退屈シツ
見テヰタリケリ
病人ノキミが一心ニハたかんストノワマラナサラト
モカラモユタヘキ
純情ト思ヒタリシワガ心今ノワカキ何カ話
うん
玻璃窓ノヲ開ケバ寒キ北ノ窓一面ニシン森ヲ
ハ思ヒ出シキ
玻璃窓ノ外ニ見エヰン秋ノ空 かうスノ如
キニゴリモアレリ
海ヲ隔テニ高等商船が見エン望遠鏡ヲハ塔ノ時計ノ針ヲ見エルトイフ
九月ノ終ノ海ニ小舟達ムレヰン見シバ生キハカナシモ
高ノ葉モ色ヅク頃ニ朝日サシ君が子ムラムサメントスルカ
死ニシ友ヲナツカシム心ハテシナシ生キヰン友トイサカフカシバ
閑ノ心ハココニアラザリヨシトイフ君が家ノ熊モ今ハ何ナル
カノ人ニ今ケテユキシワガ心ワレトアナシ涙カ出デ来ヌ
一人居ニナシシト君がネフユトヲソレモヨシトハワカキニケリ
若妻ニ見舞ムレテヰンユノ思ヒ性急ノキサシ抑（カタカラン

菊ノ花、野菊ノ花、薄ノ花、虎杖ノ花

来ル日ヤ又菊ノ花畑ウロイテ菊ノ世話スル男カアレリ

虎杖ノ咲ケル堤ニ向ヒテ我ハ何カ考ヘテ

薄穂ノ何ニヒテカサヤギヤ美キ少女ヲ口レシ隨ケリ

曲リ曲ル鋪石道ノ裏段々ヲ下リテ来リシ紅ヲ多クノ人

カヘルコト又暫時ノ幸ト知ラン知レドモヨカラザラメヤ

追ヒ越シテマタツラカヘスコトカラスト思ヒシ丈女ヲツラカヘラ見キ

花崗岩ウツケテ白砂ノ道ノヨミナリ美カラザラメヤ

Ich kann nicht mehr einsame Dinge.

枝ノ花サカリニ至ル女学生ヲ群レテユク姿ハカナシクモアルカ

一首　西川夢夫ニオクル（十月三日）

木犀ノ白ク咲ク夜ヤ二人ノ世ノ幸ヲ人ニ言ハカタシ

眠ラヌ夜（十月四日早暁）

眠ラヌ夜カカ寂シク

くらがりにたがいて居ル

頭ノ大キナ死ビト来リテ

床ノ傍ニ坐リ居ラム

その口はいまくつたいちびくだ

眠ルあるん今年博物学会ニ送ル「ユーゼニックス」の問題ニ関スル論文ヲ書ク。

「まばたのばらもんじ」鐘田氏ノ提案

腐肉の臭ヲ嗅ぐまいと

いつしんに息をつめてゐるしんどさ、こわさ

× ×

私ハ冷酷ナ牧夫ヒトである

私ハ私ノ感性ヲ凡テヲしばりとる

私ハ悔虐ナル殺人狂ヒである

私ハ私ノ情緒ヲ斬刑ニ處スル

私ハいつまでも怒ることか（一〇、廿四）

西原直廉ニ（一〇、四）

きみの住む町とおもいてもくせいのかをりの中をわれはゆきたり

もくせいの窓ようにほよ車んゐてこの国のきはまるところを見たり

みいりたる稲田の果の山のいただにひそまる雲もわれは見んけり

十月は木犀の花金ノ咲き海のあなたを思ひしむ

十月のプーンは寒く二本の友こころ一国ノ争ヒを見き（対岸ち戦的、51）

× （一〇、五）

言まいせぬ街ちくのみのVATERとあらそひのゆめをわが見き

ちくのみのVATERと争いせむす（なを性の瞬間ゆめを見しまま SPLASH ノ）

Zimbalist
Violin Concert
at Asahi-Kaikan
on 6th Nov.

授業料滞納の通知来りあわてかねと一由紙はんけり
いろいろ考へて思いあたりしみそかごとあらはれたれば気は先づ晴れき
十月六日　新潟後を経た会アリ男のうなんの暴レタリ

↑松浦
森サン　ちばりえよ　五二首

演奏会はて、出て来る町角に月あかあかとのぼりたりけり
ビルディングの街に灯消えて月高し都会の窟しさせまりくるかも

× ×

おのが身の低能を全能に振しすかめたる二本の人達爭ひたりけり
つくづくと考へて見れば阿呆らしみうむしみおもいてたちわたりけり
いかともよ文化しらなせを二十とせのをの二十ひしてたかしうなせを
記念塔の寄附金の多少を爭ひからんしかなれば況はれはんけり
をゐびとよ　何の事なれば伊藤博文を出せずして止むるともがら

十月七日

十六夜の月は南の中しこのたち生物の輝く火星は居たり
だいかいの星は東のほうゐたち おあかき星と見てゐたりけり
十六夜の月の光のこうりゐる蓮池の蓮はにほひするかも
東に日のく火星を見てゐるいとをの肉のこころわびしとよ

ゆるやかに日に見える程に傾ける河内の野の低軒を見たり
みんなみの金剛のみね高城山ひけるすそのはきはまりて見ゆ
とほきよのすめろぎのかみのみことおもいてあれば なつかしを野ら
秋の日はすいさんさして牛のゆくつゝみのみちは白くうんけり
埴生野の高き台地にけあたり日はくれとす河内國原

×

よるのおく月の踏切こえむとき まぼろしして人屋を見たり

十月八日

古事記を讀む、（日本古典文学研究　太田亮著）
白兎　ことばを知らずわんめとなげつらひせし古しへこいしも
稚子神眠りのおせる葦船の潮のまにまに流れるところ（九日）
二つ神浮橋に立つ雲の間よ潮鳴りの音ますますところ
なきなみの神めぐりますみ柱の出雲にんして雲立る見ゆ

× × ×

つゆじめり重き夜あけ松林あん一樵 病やみの女ん 今（う

[illegible]

曲馬團（一〇、一一、藤巻芳林曲馬園）

まはり廻つて此の土地の
暗い淋しいまちはづれ
タラタラタラううと太鼓が鳴る
旗やのぼりを吹く風がきらよ

私しやみなし児ひろはれて
太鼓ん鳴ておどるのよ
うレうレうううとおどりはすれど
目いはなみだがいつぱいあるのよ

少いお客もかへつたら
おしろのかげでぬるのよ
サレサレサううと夜風が吹けば
夢ん太鼓がいいてくるのよ

秋季演習（一〇、一三―一四　於信太山）

もるがせん息をひそめて立てらしか敵陣深く伏候ゆれは
やゝ一ぐんゆれうごまるみたはらん自轉車のひと立てと見てゐたら

Deutschen Auslands-
-Gastspiele in Arahikaikan
Darmstädt Theater um 7 p.m.
16ten Okt.

うゆれたるんともはこれをばかたるならみなしきこころなきにもあらず
埴と野やの台地となりて金剛の山のもとの村も久えたり
柿もみぢいろづくてろか鳥は峡の池んかつまして遊たり
ものゝはなやうやく少し この夕した息白ゆれを見ましんけり
あさのひのなごめん出してしいまるの演習やりて草ん鳴ゐとす
きらかよへるあでらなかめてゐしときはひをもゆれも許したらしか
ゆゝくれんとして峡田の時ゆれうゆきあはばかまのはな白しと見たら
青き星なかるを見たり たまゆらよ感傷心はゆれんきりけり

思ひ出

"ALT HEIDELBERG"

川のきりほのかんあまし ほつたりと城山の灯はつきんけらずや
しろじろと月はたけたり馬車の音かーるはけゝもよりてか（れる
ほろほろとぴーるんかけかまのよるのけてのばらんとげきしごと
ころも手んまりはおもたしものゝけん けてのこいんなくゆきこゆる
川のおとたかきりしときいとしてかーるはれんりんしものと

いまもこの種のうたは長ぶ、おろの存れなす音ぶ下

仲秋歌集（五、一〇、二二）

富曲ー高岡郡村御厨ー新家ー玉川村菅江ー西之郷村中野ー
ー本江ー黄瀬ー東之郷村吉野ー竹田ー加級ー佐通村ー宇陸村深
野南ー中埴安ー寺川ー野崎ー江ー四條ー比條ー甲可村竹崎ー
ー中野ー国山ー豊野村竹鉾ー寝屋川村塩溝ー清重ー川北ー
ー佐通村大国ー佐通ー一次塚ー北江村鴻池ー楠瀬村橋本ー今津
ー稲田ー二宮曲村　此行程約七里十町

うれひてみちを来れば十月のもみづる山ちかづきにけり
常盤木んもみはしるき秋山のひかりかがやけて立ちしなすら
みちなかん鴉とりぬてものはりちかつまゆけばと地べ立たなかか
遠方ん富おつひとを呼ぶをのこいくたびもよいあきらめずけり
まなかいのおかのぼりんいはあら白清を家もたえんけるかも
かなしみはいとんぶおとなるまをのせてすくきのみちをわれはゆきてのか
けのごと日のかげうすきあるいとえ敷る日んはしんあそびき
かなしみのすべてをおもいはてしのちいとけきいのたのしびをもいき
はせの樹のもみづる家やいくつならむうれひの去らむことはおもはず
土堤の上のすくきのみちをゆくいとう肺病やみの女のはなし
たまきはるいのちもてあそぶこころまたおこる雲ゆき日ん野んあるて来し

はるばると遠つ山脈はてしなし山かげんして山はありしか
遠つ連山銀ん鈴ん つらなる空のすみのいろきはまりたれば われはなきたり
妹をおもひつ、食おべんとうのかおぼこおづくたるれたるかも
たれをも恨むんあらむこのみちをいつくわれはなきそのたて
家とやら友をはなれて堤ゆのつりのゆさ、を愛しみてゐたり
このくんのきはまるところあおの山白き建物見えんけるかも
れ、れとうつばならして長ゆけらつばなをとしらそめんしの
笠敷なくし笠のあれのゆきしあとひとりわれはゆきんけるかも
山のいろうすきくしてはてしなし彼の[illegible]のかはいびけ
菊の花去みろのこころの秋方ん愛をもうひし動音
さきはいのもくしきもものもしもいとうなきつしきたんみちをとる
おくはばとえんあそびしこともちろんこれはばやはりこのよのこと。
野の中を汽車はえをしくすむやかりいつこのまちんをとはつろむか
うれひまてわが学生の陰んあいせてすべもなくかなしみけり
おひりぬしエゴも赤れたりナ月の山のもみづのかをしまかため
野んあいて笠の気配を知りしのゆエゴいとほしむこころおそれり
このうらみたかゆえならずいつしかおのれのをみねたりけるずや
このみちや広をみのうのかたのみちをあれたの[illegible]もうらみたまいき

十月二十六日
海軍記念日
軍艦の探照燈の光芒われいかばはなをを思いぬ

× 水兵のみる風景

十月二十九日
ながつう
松つとと

テオレサーレ明るき街に水兵らい群れて行くはたのしもあるか
水兵の眼立つて多き夜なりけり夫に敬礼しあるを見たり

× × ×

市の歌に強き新玄の観眼のまどさ
戦争の現実的哀感調
春秀の彫の鏤骨の歌に多がすして強うる
寒雪の重厚、千樫の光に対する敏感、白秋の
詩感もなし、歌を止めんか、
今迄の作品中自ら好きものを挙げれば
はつまぬをはるばる来れば擂磨灘海のさき(一白玉雲立 四、六)
向つ山の茶みん春さ花くさぎ花の中ゆ蒼とび来る(四、八)
下草の羊歯のぬれ葉のもつ光この杉山にみちてかぐはしゆ(仝 五)
飛行機のぶろぺらの音たえたりとわが足上るに白雲(四、九)
まつくらな樹林を歩むとき人の叫ぶをきいるかに思つ(四、九)
平の家端に立ちて歌じ歩きゐて菊雲る人に会いにけるかも(四、一〇)

丹波山をほつゝゆくとうら悲し森博士は今はあらずや(四、十)
ひるすぎて時雨止みたり わが庭のむくろは遂にもえはてにけり
夕暮の木は白くなりけり 杉山も霜洗ふ色とぞ望まる
きまぐれのぬくさんのむし豆の芽はついきて来る霜にかれるとか(四、十二)
ゆふあめ冬木のぬれ木の小ぬれ白々と雲かうみて ふかぶる見ゆ
ほのぼのと心ぬれて大年の大空をみてゐたりけるかも
みなかせの鏡の池の水へ向て光る生物さしとぞ思ふ(五、一)
自己憐愛はげしきときあるとき わが身しばしばうかべつつ(五、二)
あまぎらの光あふれて春畑にあるもものの花咲きにけるかも(五、三)
木の芽の白い風にまじりて来る夜は虎杖もてる人とのうあばす(五、四)
北風はまだもん来る日は雲に入るみちばたのゆうべの木の肌の冷さ
こぬかの雨池にあるとむ中島のまつの花はめずらしいかるかも
五月野に雲はうんもか野を遠く伝説城の桜々見えんけるかも(五、五)
女子校のほぶらの茶りいやのかゆうべ花ら鳴きもるなり(五、六)
ひるやみに病院の子のぼりみる身に黒松なまが気の毒のごと(五、七)
ゆうべ人はやもう寝ようとはゆきあるを上りみはゆきあるを勝ぶのしみる

雨精社蕎蜂起（五、一〇、二九）

朝のまりやうやく動くころとなり蕎人蜂起をきまんけるかも

青山のはざまにこもり何すとかはけり出しけむ山のはざまに

山峡のまりはやおれて蕎人のをらいでぬますをちこち山に

わやかん山峡いづらく運動会阿修羅の場とをらむと誠か知らむ

君が代を謡へて礼し先生らの人かこうすをまためん兄たち

山あいに朝はじまれば蕎屋んけむらのぼるかけるの如く

蕎人の血んあ（し搾あかあかと山の夕日んてうんけるかも

夜の闇をたき明かしたるかじり屋の土の黒さを人はえんけり

肥えたらし郎子も首を刎ねられてこんこころかるこのちのいくつ

蘭の花こずるん咲きて散りみたりいまはを人の息つきしかも

この蕎とあのやかん人死んだらとのちゑあれとらいい行くらむか

蕎人ん討伐隊迫る（一〇、三〇）

討伐隊せまれるしらせ蕎童は茜鉄のもと（もたらしんけり

あまかける飛行機のら日や人草葉わ屋をひめん来るかも

この蕎社立ている時の来しををかかぬ書しをとかれらは知るか

山闇の世界せはみ蕎人らもの知らずしてはかり絵畫ちる

蕎界の滅亡の時命はいまの来迫蕎童らの数はのれんけるかも

十月一日 於松竹社

ひるの日は山辺ん言しゆ張のこし蕎人どもはひかせけり

山峡ん栗を食ゆて生きしいとらはりつくれ栗は枯れむか

もの花年辺んゆれて水迫し土人のかはわ流れ行きしか

銃のおとこの山峡んみちみちてあかいね色の日は昇りしか

死んもの犯いの土人のたまん討伐隊の兵は倒れきこすかあいん

わかの心の歌（マコーマックス）

松浦悦郎ん捧ぐ

十一月の夜かゆ来れば七るおちばそのはかなさん人は逝きつも

うす青き夜の一闇ん暗幕の文かく女はやせてあるかも

連丘のはたての空に月落ちて沼地ん鳥は鳴きつどへけり

あ、アイルランドよ

わかき日は事ん言ひめ（し時期すぎゆれば あきらめ去るも

二十とせのわかきこころんするわかれと妻やさん 断念もふとよ

あ、アイルランドをれが丘辺の晩秋ん人死んしてゆ報せ聞くかも

うつろなる眼さあけてそうなかれどゆんゆの夢またやかへらむ

一刎ん並びてあらし銃の兵隊こわれつくしていくゆを征し

あ、幼き日なでかなしみしおの玩具兵隊のおもちゃはいづく行きけむ

涙あふれてきみとわれ眉くみあひて

物事の始まるとも、終わるとも
青空のけむりのごとくはるばると
とほきかも、はるけきかもや

× × ×

大年の日はすぎてなげくこと
わが祭の月みは去り
むさきこげ類へをいたり
もはや可愛からず
女のこといとしく哀からず
あゝして女をこのみることを――

× × ×

私が子供の時
友があった、銀の兵隊とわたと
わたし私はいく度はいつりをしたことか
そして又銀の兵隊はいく度合戦し直したことか
私は大将となって物言はぬ兵隊達を指揮した
すると吉さんがこた、でもはきものをもらうなのとあった
一番好きな兵隊のとこが折れた時私は泣いた

それはいつも小隊長をさせてあったのだ
わたしは可愛かった、抑へると泣き出すのだった
あゝその眼がとれて遠くをながめる年になったことか。

十一月三日

京都、西垣、林

いまでもあるまみが女の何としたことぞ、わからひたすらかなしみみるに
世に在りし日のまみが笑ふる像久木が君死んしこと信い得んかも

×

町並のはつ木に青き比叡山高もはたてに近しとおもへ
比叡山のとがり峰は空に高くして苔或後つわれら見たけり
東山に月のぼるとき歌つく牛とわれに言いしに何のこころぞも
他の街のにぎやかの中歩みをり活動を見に入りたと思ひき
東山の紅葉をとむとおもへるに友の急きに果さいらけり

十月四日

世の不景気話したかの銀行の取付はたはに会いんけるのも

十一月六日

夕方藤井寺へ行く

暗さかげおぼろと思ひし家の庭まさを今には別れかねつも

弟妹ら並びてわれを送りし秋のあれどを取りしむるんを

十一月七日　初めて藤井寺へ通学

私の目の穂の上にさす朝露今まさめんしわれは入りけり

二上の山の半ばゆのぼる日の眩ゆき光二階より入る

み陵の大き樹の梢は夜の闇に空まで入えてわを怖れしむ

十一月八日　記念祭　於伊藤(良)氏の宅にて半紙会、三浦氏

記念祭の朝まだあるぬか雨にはすぼての虎は炉にけうしも

祝賀　この秋に入りし一年生日のいく日を虎作りせし

記念祭の校庭につどひ少女らが丹頬をかがやしみわれはちぶしえ

十一月九日　又も雨　祖父の妹来る

雨はしとしとと菩提樹の葉に降りそめた

葉に雨はらくと鳴りそめた

私は夢を抱きそめた　振向きもしないで旅人が

道を行った　遠くで笛の音がした

私の夢は一今消ゆを欲しまず　さまつく私は

LIEBE を（一一・一二）

川堤とはきとところに立てる木をきみが村一つしるしときいし

つゆじもは朝々にまし堤上のぽぷらの枯木も時期は来りし

川の水光り立ちけく流れたり川のはたてに雪降るらむか

こころひとにおさめかねつる山がおもひ空をながめけおもくらせし

夏の如き乱雲立つ山辺空こい知る身には耐へがたきかも

いつの日かともに歩まむとにもくも君が眠久ずてわれはあるしも

雑木林いろづく朝の見ゆる電車に居りきみがこころを知るすべを吾

秋山のもみぢのいろのあきらけくきみを見る日がわれは知らなく

×

恵人の文に会はむとこころ決めしなの秋骨あらはむと思の

厚かしめらんなば歓起とすめ居りなみだ出し山のこころから

×

きみの住むところおもひは青山の士やけき国のいやかなしもの

国泉の中つところある村にきみがあまさもことのかなしも

×　（二・一三）

ゆうばえの光うつせる池中にうごかぬ水あり何か立ちしも

この石、雨祖姑木の時来りけり　わが歌想ごころ眠に盡きたり

学校への下駄がまだ冷たき丸太の上の霜とける時刻

山峡の京都の街は寒かろし大学をまのがならぬこころもとなし

夕づきて雑木林のもみぢのいろほのかに残りさむかりしもよ

雑木もみぢ赤き林は鳥もゐよすきの原に出すなくこと

川のいろやゝつめたみなげくことなにかあらうよおの木しらずも

この原の畑の山のうすむいろ まだ乏めるものこひしきかもよ

わがこひはつゐに止まなむ朝じものさむきこのごろたえがたきかも

秋の田の刈り乾すなべに冬の来るおそれを感じ この日頃ゐる

はるかなる将来おもへばこの冬のたいとうなるさびしさをおもへ

おのがじしすゝまむみちのわかれどのつゐにたゝむ時はまもかも

× 十一月十三日

高松に鴉こもりて冬書は葡萄すかれし園を歩もう（教材園）

はせもみぢしとおもいていよもみぢ明かるくなつかしみゐる

東の野中村辺の陵に鳥は去にたり日はかげりつゝ

くぬぎ林のかげをうつせる大池に午後の雲遍むんけるかも

まいるようたのみをかくる藤井寺にお香の白いなつかしけり

山腹の植木畑の山茶花に日かげぬくとし人こぬひるを

ほゝと遊ばつゝ飛立つ水鳥の空に光りてさむ牡むしかも

クラス会
会者
本住田
丸園口
西川
山田
田村
杉浦
田中
杉田
友眞
（大小 吸）

稲を扱く時期を野に出で寒しかも学士になりて飯食ゐとゐ

み陵の濠ばたの土堤のどんぐりを拾ひ溜めにけり少年こひしも

どんぐりのみのるとまんれば海べの弟の墓もこひしさるかも（追悼）

この墓地にわが家の墓のなきことをかなしみにつゝ友と遊びき

秋晴の墓地に友らと遊びゐませんだんの実はみのりたりしか

せんだんの鳥きてとまる見上げつゝ空の青さをわれは見んしか

すゝき穂のすかれし墓地のうらどころ無縁仏の墓はあらしか

海鼠に死んし人らの墓ら所に布ちらばるを踏みんけるかも

× 墓の木の山の肌もむらさきにあざるでら村にゆうべ来んけり

花畑に立つ花咲きさかりたらのすかれをわれは見んけり

冬まけて牡丹精力を地に蔵むも何ぞも世の青々しかも

時ちりて照らす秋陽のいやかなしきみが在には稲乾すらむか

× 酔ひ疲れて道徳律のゝしれる友は法科に進まむとすも（DEN）

世の中の律かなしく思ひいて遠くやりぬる家しを語る

思ふひと遠くなる日の近つけば白き奴隷をまみは思ひしか

一生涯言とまりにけりひめごとを人うれ語らむきみおりたま（

さくのみのさくはにくしはゝそはのはゝをあはれもしかんはあらじか

ぼく

いやはてん　鬱金撫の
かなしみの前りをめぬれば
五月はきたる
南瓜薔薇ゆれらあ
るかなく斑猫とべて死ぬ
るゆくれ

―白秋―

失いしこれを忘れむすべはなしすべもなこれ今は如何む

×

わが娘きみの卒業を待ちかたし止めよとちゝはかたりしといま（MATSU）

彼女とわれの結合をにくむ母のある、あの母をわれはあくらむ

われらあたらとよろこびしとわすれずと語りしともわすれ得むかも

×

陰急ん来れい行きて久し女の顔は赤らしかも（NISHIN）

何もも忘れてのめと思趣深し酔ひて忘れむ性ならなくに

×

北のかた飢饉にのこせしみなこいはたもあらぬか酔い泣けるを（TOMO）

感傷のあまくすっぱいたのしみにいまこのともは浸りあるらし

ひたいもりて意に得むわれならずすべての女いまはてひ撫

北海の波のひいきや浪松のさわぎかだれしわがこころかも

北空は遠く晴れたらしべりやの白き家々見えて来むかも

北空は低くくもりて北極星しづもれるかたん汽船は行きけり

×

顔美なうぬ少女をこかれしかはあれど顔美からめと考へ思ふる（GAN）

三時前かれしをみな思へかものみる酒の身ん染まざら

湯ゆえ五の弁。
私の歌は皆欠点をもつて、
九月以前のものです。浪漫
他は出版を得ません。と思
ます。鶴が死の幾
かを読んでください。
ものをうたはれは私はえ
をテロリストの行動時に
れることをしません。勝
手。

十一月

万葉地図
了る

意ごころ一年のものときみはいふ、交合せりてはゆるとも
集いかうむことのうれしかも凡てとわれわれへうむことの

×

家も親類も破産せしとかしあれど（デレッタンティズムいかんかすき）
のめど酔はぬことはあやまりきみがあし（外に出がれば もしもあやつし）（MATSUDAIRE）

×

睦理学園に照ちゃんに会いん行きたれど金無から来ばかく帰りき（皆）

十一月十四日　浜口首相は東京駅頭に狙撃せしもの有り
テロリストの非ものしき宿命も思いつ、宰相の車ん爆弾をうつ
―湯原のうた―

生眞面目一方の宰相を撃ち青年の芸居気を思いたすしむ われは
宰相をうつもよからむ不景気はとてもかくても去るものならねど
蒼白の宰相の顔新聞ん大きく出でたり生命の瞬間
宰相をうつてあこを浪漫化しなのうたをとれば かなしも
何時の日かテロリスト たらむと決めつつ弾丸打つすべも未だ習はぬかも

十一月十九日　　読む

十泉八雲全集を

散歩（北畠―長井―依羅―吉田―風破―三宝―松原）

新墾の道をゆき附楢原切り通しを出し赤土のいろ

臨南寺の森の深みの幽けからむ紅葉まじる常盤石木のいろ

行きゆきて獨もなに何故か嘆かなむきみをこふれば野に出でて来し

苗畑に鮮しきかも花苗のみどりもえつゝ色近きかも

母ゐは学校は息うざらむ色浅きこゝら畑に青葉接かる

浅香山浅き山の井見いゆめどきみなきこゝろむなしからうよ

むかしの依羅の池の古堤にすきほいける見つゝかなしも

住吉に難波に行くむと奈良人のこゝろ急きけむ難波道やこん

大依羅の神のみ杜に入るときむかしの人をこゝにけるかも

北風にこの木が堤に連なれど對岸の木のゆれはゆえざり

おかきみの風破村の道しるべぽぷら落葉は未だ盡きざる

万が一に君にあはむと来し村のむせくるしさをゆれはゆんけり

子供らしき心持てかねつ北風のはげしき堤いく町を来し

埴丘の赤土をとり瓦焼き富んやくを見ればかなしも

埴土を運ぶ車に繋く馬の苦しき声をゆれはするかも

× （二十三日）

わかきみん。今は半月それゆえんきみかひとりもほとと高木き

二上の山の低鉢のあやをん霜置きけむあらはに見ゆる

大伯の姫王高いしつせみの兄背をこえて山登します

山腹の菊苟畑の葉は落ちて日だまりの土に鳥遊ぶらむ

南の空雲の感觸のそのやなうかき妹を思はのや

散文的なその日

文鳥を選ぶかな法鳥ゆんか

強く生きよう。しかし――

× 人形芝居（文楽座、二十三日、忠臣蔵、肥下、伊田、落月、西条）

僕のひかみ心を許せ

弱いからよけいに弱くなる

金が無いから淺間敷なる

泣かうとすれば笑へとする

判官の切腹姿の凄じさ、人形と思はず、屍の様は

森良雄

起たなかった話（高田」に関する限りで）

耿太郎は事の始めの様子はよく知らぬ。何故なら彼はその発端となる（き思想善導の集会に出席しなかったから。）その日の朝文三甲の小崎（この男が一番熱心だった）が俱野現事と文三甲の間を往来してゐたことを知ってゐる。彼の二時間の授業がすむと講堂で来た教授河合栄次郎の講演があることになってゐた。耿太郎は好奇心の強い男だから早速御見物と二人知人の家へ遊びに出かけ、午後の合同教練に間に合ひ帰って来た。所が未だ誰も講堂から出て来てゐない。ずゐぶん永い講演だなと思ってゐる内一時過ぎになった。事件を聞いて来た。「昨日の午後五時限の終り文三甲室、文三甲上武、中道、壇近、理一西、山田の五人が阿佐野君（俱野君）に張られた。それは学校と話合いをするのだ。そこで催促（佐野）を出して講堂の集会（参加）に行った。耿太郎は又自分の教室の面がいたづらをしてゐるなと思った。入って行って見ると第一部してゐるものは文三甲の連中及文三（福田藤田）文三甲の一部である。アがそれるのはすぐとして此三の不良面目な輩でそれらの説明によると出目金等がいけないのである。かはっきりとは因縁を来ない。その中出目、朝生の二人が兎々と説明をしたので耿太郎も疑雲が立って来た。それ以上何ならしく

本宮丸
西川、本位田

提議した。一文三甲一同ありとして、「一、吾々は今回の生徒課の言辞及態度に甚だしく誤解せしものと認む、一、吾々は生徒課佐々木書記、伊藤朝生両氏の辞職を要求す、一、学校側の陳謝を要求す、一、教室内騒擾に対する抗議を申込むことを要求す、一、今回の不当なる拘束に対し教室内の説明をなすことを要求す（倶田の提案）」以上三ヶ條の採決となった。耿太郎は保留党で一ヶ條の誤解を認め、過度を感じ過失と認めたが採決の結果非常に少数で落ちた。この採決に於て後に反対した M.M.M. 等の者なく反対表示をしなかったことは覚えてゐて欲しい。この採決の結果生徒会は生徒課の誤解を認めたことになった。その上は以下の四ヶ條の通過する。これは明らかである。「吾々は此の要求が通るまでは授業をうけず」この條項が加はった。耿太郎は此の大会で多くのものを失った。例へば耿太郎の入る迄、或る人は「先生、僕は授業が受けたいです」といって泣き出す者へ「さうです、さうです」との賛成を得たことである。耿太郎の目撃したところでは「先生に対する要求をするのは果して正当なるか」といった一年生があるし、授業は断じて休まぬと頑張った文一甲の連中、「俺達は勉強したい、世界中を見る為勉強をしたい、そんない事を止めて（そして）授業をやれ」と注

いた弾劾三年生もある。或は生徒課の説明中、前の人内の陰に隠れて野次った弾三生もある。此の最後の人達は学校を休むべき大勢感で提案した女人達である。といふのは、この空気の中にあって敢太郎等は退屈し乍ら静であり得た。そこで明朝、決議案に要求を附加することになって一先ず解散した。時に午後六時半であった。この生徒大会をもしのんなかったことが敢太郎等の後に非難された理由である。如よく覚えておかねばならぬ。

翌二十六日の朝八時に校内に集り講堂へ入らうとした所の如く閉鎖されてあった。如い平空の如く空の食堂に集った。そこで代表等の交渉すべき校の解答を待った。此内容、上記両君の説明ある通り彼等の無嬉戯なる釈放されたこと、学校側のデマ等を内主敢太郎のみも漸次性徒課の誤解を認め漸進とした[illegible]如く帰って来た。なを此内外内容(文三甲)の時、其他のアガ演説があったにもかゝわらず又性徒課のデマがあったにもかゝわらずM.K.の者の赤色は反逆とそなく敢太郎のやうにもすれば也え上らうとする輩は直に消滅するのだった。その中に学校側の解答が来た。(三日内の隠れ休業なる者のためにそれから先に発表されてゐた。)第一は後に詳述説明とし、(二)は生徒の要求すべきこと、(三)は

朝性遺憾の意を表す(四)抗議すべし(五)に対しては不当なるのことを除く(し)が来てあった。場内には一時沈黙があった。それは相当永かった。この明らかな拒絶の態度に対しても生徒等は内面には智性を叫ばなかったのである。然し漸次場内騒が起り遂に紛糾(それは常なるアポテーリーである)が起って学校側の無理解を非難し出したが盟休に入るとはなかった。併し第六位に位すべき要求の要点でないから授業を受けるわけにはゆかぬ。それ丈はわかる(きいまでもあった)たが敢太郎も気が着かなかった。やがて校長の自決を迫るものが出、それは強硬な指示に至った。なくして今後は一致学に泊ること、そしてあら盟休の宣言式があることから各級はたゞ別々に集団を保つこと、としたる之が午後四時頃である。この内容を、野球部部員の唱があったが主意と甚だ迷惑してゐた。

破れたり(十一・二十八)

肥下を訪ふ(布忠子)

刑務所のおたちん落ちし陽のいろのまなかまことを忘れずあらむ
夕べ木・もの音のせぬ刑務所の塀をゆきひとりゆきけり
古根の畑の道に日は落ちて葉ぶのいろの解しさを見たり

拷問の甍の音は聞えなくなる。刑務所の塀側をゆき遠くの號笛を聞く
子供のとき使ったクレヨンのいろ、そこここから初冬の田んぼ道は、
大根は緑、柿は赤、夕雲のいろ、池の水、子供のころをかなしみてゆく。
街道の古びた家々、蜜柑畑を夜は来らしも。おお歩みわびなごず

×

空想の中で私は大驚んなって　（一二、一）
西亜細亜のこりアへと飛んでゆく。
そこの空へ来ると下界は一面の
砂原で陽が焼けてくれんあつい
遠くのくの空一ヶ所地中海だろう一
に眞白な雲が立って静止してある。
この無雨の砂漠の中一の都市があって
白い砂まんせんを落してある。一ちいさい
と。静かとも虚ろとの象徴の如く。
私は暫くその市の上を飛ぶ。すると
私のめがねやはり砂の上に思いい[redacted]絵
となって映るのだ、やがて私は同教寺
院の赤塔の輝くまる。この時私の此角は

at Ohashiya
with Mr. Usui

陽に輝く純金の避雷針とも見える
ならう。私はじと止ってみる。私は此の強
いまぶん耐えられなくなったのだ。私が眼をつぶる
と白中の黒砂漠を通って市の門へと
やって来た陽市の駱駝のいなきが聞え
る。私はその夫、眠ってゐる。やがて涼
しい温度の変化で眼を覚ました私は西の
涯へ沈んでゆく陽を見る。回教寺院の
鏡が金許から起る。此時私は限りも
ない郷愁にいたきするのである。

ローレンス・チベット　要塞の唄（十二、三）

一昔を雪かぶる山の峡、
マーカしの国、ここに美きくすめら
即ち我が母と妹、
白い日に美しきれーす編めり
山賊雲雀わが、要塞の旅より帰ぬ
微笑の匠へ歓びの歌喜きかな
我が妹、二十歳の若きかな

踊り下りて一旦踊る
美しき微笑と輕き舞
こゝかしこんにちもあらじ
こゝに一人の士官あり、言葉住と
書き身しるもて居しめぬ。
公の面にて、
あれはてあの處女。
取てめらんばなきじ、味は
其白の面を俯せて家に帰れば
部落の女一番く集まりて慎り悲む
言葉に嘆きし處女百合
一輪抱きしゆゝ我は帰りて
復仇の時を聖めぬ。
少年は自由の子、山の子、山賊雲雀
我たちは止まじ、天上の山地にあるも
あれ我たちは止まじ。

× ×

君よ、行かずや言加東

雪頂ける山にん朝日は
赤く輝きて谷間に煙の昇るなら
今諸々の鳥啼きて部落に
朝の業にあり、見よ女
涼みまが清き山水、麓を
百鳥の声
君よ行かずや言加東
言みの牧に駒嘶きて
今中空に日は高し白蓮に
雪は残れども白の土の温とに
淡雪草は咲きにけり、その美しさに
まがつまて女の子らの歌声は
峡にみてり
君よ行かずや言加東
谷間の部落に灯はまて
暮れ方早き深谷に見上る
峰の夕明り牧に駒呼ぶ角笛の
ひいきとはく、さんたまりあ、鐘の声する

夕べを いざ同輩、祈り
捧げん、 寄加賀の幸ある
× ×
落葉松の梢に鳥啼き
啼き止んでの後は山峡に静けさ
神を恐れぬ山賊も今宵は
遠く山彦の音を怪しむ
夜更けて焚火をたて精悍の面わ
峡に獣奔って空の星しばしまたたく
永き夜を暴風も来ぬか、今宵夜
北の方 谷の上に霧のさやぎ
川の音 高まり低まり幾度のち
夜明け、 落葉松の実論から

息が白い、霜の痛さ、霧が移れば
遠山嶺の頂に赤い陽が、
鳥、鳥、三羽立ち、又静か、
霜柱の上に獣の足跡、焚火跡の猟籍、
あゝ又、移る情をつなぎて
幾里の旅を今日も又、山賊の胸
× × 湯宿を去る
阿羅世伊止宇、あらせいとう
南無寺に咲き出すと あらせいとう、あらせいとう
南無船が参ります。 ながさき港のはてばから
けふも三隻 [illegible]
阿羅世伊止宇 あらせいとう
此まいろに咲きますと あらせいとう、あらせいとう
沖に白帆が浮びます。 しやかたら、すきとう、ぽるとがる
行けない国のなつかしや

増田氏元（一二、四）甲南病人ホームに能勢と兄弟の
たまたまはるいのちの終り近しとの報高くなりし横顔を見たり
だだっぴろき病室の寂寞寒しもよるより月光入るのみならずや
東に希望の星の輝けるこのごろの空を見ずかもあらむ
山茶花咲きつゆしも深きこのごろを細りし体耐ゆると思へや
やうやうに終に進むわが友のいまはを待ちてわれら耐へしかか
病院をいでてゆくわれら丈夫なりし友を語りぬる
暗い道を歩き身に迫る死の影に慄ふ落葉した木
友ひとり死なむとすると待ちけれ　けの永き日をいかで過さむ
全快の暁をかたる友の顔に死相あらはれ涙湧きくる
別れを告げ握手して出でたちたわれらも暗きし君が手にも
時雨の満月近しうす暗き病室にまみれ残れ妙なるず
喉の痛みに食べられるものも数少し明治屋のセリー買ひけるのも
どうしても治らぬ君と残るわれらあきらめ　ら不安か
摩耶の山上寺にのぼるけーぶるの燈かなしみ神戸の街ゆく
まつくらな坂を下りゆく道　流船のあらしにんげん

× ×

神様があるなら救してやれ下さい

彼女はまだ何もしてゐません
いいことも悪いことも、彼女はまだ子供だったのです
女のこと思ひあいとヨツヤるといいやと
考へました、大ぶりは農科（ゆくと
云います、家が命の存続が問題である人の
関心なのです

× ×

山茶花のかげに女の子が泣いてる
山茶花が咲けば雨戸が降る　自白がまる
山茶花の頃にまつと友を失ふ
山茶花、山茶花、何と寒い星だ

× ×

児玉正治が発狂いたしたとのである（一二、五）
出つりやの児玉正治は気がちがひ　ケラケラ笑ひ出せとの
あるひは笑ひあるは泣きつわ言云ふ　この頃失せた児玉正治は
実こそもの増に脚を這ひ　友の狂ひ　きこんけるのも

阿蘇田原（一二、八）

鳥散りて枯野に光る銃の音

久二川に煙草吸ひ指て寒さ哉

午すぎの物のどよみのやしばしじつまらあれや煙草くゆらす

物の音をちこちん起り傳ひくるこのひるの野に出でとり生れる

街道をどよめきしゆく乗合ん人女もの乗りぬるのあいに

名畑の大根畑ん日はおちて大根をもぎとり引抜くあり

大根の青葉の[illegible]

野良の地平線道暮るらし車行くえゆ

秋日ぬん此年水日の山山嶽を思ふ

六稜の山角陽を受けて

蜂群黄金のえなす！

俳句日記、お二人が死んだらすぐ

死なん嬉しさよ

俳！！相角の死はくんえぬ、死ぬ

まこは

毒瓦斯ちえどは山積子の匂ひすとて

山積子の盛めくらし道くら

俳句日記一、

言のこ[illegible]ばく「ちさ[illegible]」

はアラ[illegible]キのまゆ、月論[illegible]

時おりはアラ[illegible]にかつ

みたいうね。オリ[illegible]

うまいのはちとい茂[illegible]や

白菜のまねしすよ、ボク

が川[illegible]をのき換えて

やれとろたがかいらえ

のなあ、コクトオかえん

なこをこれったのだが。

この[illegible]のこつこつは

はのものの稲なえが

すんりが「ノートの[illegible]

れ[illegible]かいたから[illegible]）

首くくり日向の枝をちんけり

叫び漢ん[illegible]を集ふ

俳句のオ[illegible]を綴よ「古き[illegible]」の一句の

如き一寸[illegible]とてこれた

及びいんザ[illegible]知る[illegible]傳作其他[illegible]

柏屋東

むくろをつまだてとる手の白さ

野中寺の鐘を聞く

くるくるり日輪すはして葉の花の畑蓮ゆ[illegible]

仏中のかのこの帯のなまめかしと隣人くるりて言いんけるの

野崎舟上陸が立き葉の花の香りかをみ屋女手折のま

久松の社前四方び畫深く桃の花挿しかるゆ[illegible]

×（一三、一〇）

大根干す松の梢に百舌鳥は来ぬ

廃園「焼野」戯頌（一〇）

去年もむもん秋ずれば人おのおのに調ち

陽原の盛傷　三崎の戦　猛者の活躍　銃二の敵

ゆうぐれだね（又と美）

原の慷慨、比企の可憐、伊波の官能
しそとりどりに好ましく例へば　摩木し長崎の南蛮寺の
園生なる花の色香に古も似たり
葉薊、百竹、百合　合歓草　紅玉牡丹、忘憂草は
ありしあれ　昔の花のあらせいとう　あらせいとう
秋へてしばらくしなほおのおのに咲きあり　例へば湯
原が葉薊の花　いるのたちは摘み果てたいゆうかけん咲くもの
を。昔の花のあらせいとう　山は聖教もともとも知るべき
なきその白い。

盟休様を出土地内校長声明す（一二、一四）

雲々と山にかかる古路ゆく朝、浦のあひまん草は素拓たりけり
あのまゝの電線の空ながらまつすぐにおちる鳥あり　枯草原に
十過ぎやひつそりと鶏しめらかる
眼を病んでまいるまばゆき牡丹咲
氷とけて大根の葉流るわりのなな

藤井男隈（一二、一三）

みすゝむ近き淋しき山あり　帰化外人は住みわたるなり
山かげに外人の家久しき木は牡丹の園にわらかこひせり

白雞園に遊びて去る外人は園を懐かしみあるも
重ねてとの道しるべあり　雲深き山おくの寺男はゆかも
なき時法さとみはいつもおほるのかなしみんたへ淋しるる
冬ざれたんぼ、花咲く山原に小鳥下り立ち妻ぞあらも

十鳥の秋

れんげつくみ　群落の雀の群
濃いは游ぐ古鴨が——
渡り鳥、渡り鳥、あくの田んぼ
山葡の澤に細い一ぱいの鶺鴒
冬は秋の冷い　小鳥の来る吹かから
始まります、もう始業の鐘です。
百舌鳥は金物の焼が去眠しられてゆるせいて？
雀は百木枯のうた後を？
十鳥、小鳥、——
弐鳥が今日もお弄の枯れいこえで
鳴いています。空の晴れた日です。
枯木に柳にあはせぬが来ています。
長い尾と可愛い声の

お葬式二つ（一二、一三）

塚本大六（大十八）八日 於廣島市 チブス

結婚の二日前 一カ月子を悲哭

かりそめの世の中かなしつまどひを前にひかへてきみ死にたまふ

泉鏡の事哭かむことは赤のまりをとめ

きみのます国へおくれてわれもゆかむとをとめ泣きつゝいのりけるかな

何事ばかり兄死なせしと宿主 麦めんけうとをとめかなしも

城右眞助先生 十二日 於鳥取自宅 西澤

口あらくわれが未来を予言せし師は逝きたまへわれが二十歳に

冬風のさむさを嘆じたまひしかん咳をしつゝ叫りたまひき

× ぼくの死 （十五日）

ドアの外の宮ん木の木のむら木立死にて坐ますは誰が御魂

ゆふぐれのかなつみおとめこうたゝば海神くれをばとめむものゝなし

× 芝居

ヒーターの煙り鋼の白ひする朝の電車のこゝろもとゝのわれは

西川京法に決意す。（十四日）

ちゝしかり西川英夫が皆とはなれ京都にゆくなる寂しからうよ。

（二十日）

憂愁を欲するものは此の門をくゞれ

取辱と屈従を見むとするものは此の門をくゞれ

死に近き生を見るを欲するものはこの門をくゞれ

微笑もてくゞれ。泣きつゝ出で来るべし

この門の中に悪の華咲けり 偽善の花咲けり

贖えた喜びを欲するものはこの中に入るべし

罪を犯さんとする者入るべし。罪をあがなはんとするもの入れ

焦慮をもてるもの入るべし

この園中に悪の華咲けり 冷笑の華咲けり

悪罵を欲するものは来れ。

哀悼の児は来れ。服喪の女は来れ

慷慨を好むものは来れ。偽憤を花ぶるものは来れ

この亭中に悪の華咲けり 死高爛花咲けり

Der Reimsmond

月 痛 苦

時雨月をはらん近くあはき秋しみ空静のなるこのひるにして

首青き鴨の羽色の夕光り光り消えて眠りに入るか

鴨の羽の光澤かいやさ向岸遊べる様をたのしといはむ

またたきの(るり)無月の
あけぼを詠ん詩るつき
詩歌のみつえん花たれば
あをまゆの目でひとゆる

新
温漫派を
樹立す

PROLOG

ひるすぎの葛木山に迫る雲 地物なびかし風 過ぎにけり
小春日のぬくみ背中にあつまれり少年の意 読みにけるかも
薄生のすゝきかこめる池中にひるひそかに鳥来りけり
花皆のすがれかなしも園にひとつ二つの花咲き蛇来る見れば
草原にまろべるわれにうすしとゆき羽虫をこうしけるかも
曙き野をなつかしみ少女らが出で放つ見れば わかこひ思ほゆ
こひ人にまたあはざらむ知らさいらむ意の果かたる書よみにけり
雲ひくく地を包めるまひるなりまゆみ実れりその赤き実を(植物園)
植物園のかきのどんぐりかなかも 埃まみれのどんぐりなるかも
こりゴリの咲くころとなりうらかなし知り合いの人訪ひ病みぬき
どんよりと空うごめける街にあて ~~[illegible]~~ 木は思へり
一度 慣んだ君が
今度は俺をにくむ
あり方ゝ方の事だ
さうなれば ならぬことだ
時走の幻想(一二、二二、及び二五)
エルネスト レモンましろく消えし辺に(鯨の)この詳は
× × 自雲杏

EPILOG

モロッコに行きたきあまりアフリーは親の金盗りにげにけらずや
アンリーは船着場にとらえられる 親不孝めと母泣きにけり
アンリーの家に帰りて五六日心おちつかずものも食はずゐる
室にこもりアンリーのさま静すぐ母はぬすみ見 気は絶えにけり
もろこの風吹く窓に向いつつアフリーくびれいきはてゐる
アフリーの汚れし襟に食い入りし縄に南風はわれにけるかも
アンリーの死顔青し小麦色アフリカの木は茂りたりけり
アンリーの生きの中こそモロッコの風香はしと云はましをわれは
アフリーは語なげらむ生きのまの快きこと即ちつねによ
アンリーの墓に咲く花おつ赤なるモロッコの花 時じくの花
アンリーの死んでいく年あらんすの少年の眼は今も南に
半人半馬かなくよわけアンリーの墓慶い立てり友どもわれら
南の楽園にゆく時たらぬ君が墓辺に花もちかつらも
エルネスト レモン白く南に消て果てしとき君は泣くらも
時走の忙しい日暮中にもえな南云ことを考へるから

倶楽
お金を失くするつだよ
きみならば流れかえせもゆかぬところの花
あらるべの他つ女に平折られしこころうや

Allersensualismus

Marugai　　Ebis-Brücke

手折られて手折られたいに道辺にすてられにけり

× ×

僕は即興詩人になれる。と思ふ。

ツネヲ曰く困たら人命にかけて助けてやる。

× ×

ツネヲの唇にバラーデンを訳すべい。

× × ×

電気時計の針の動きの見ゆる如、月は落ちゆく時辻の穴に

マント吹く風の寒さよ冬風にネオンサインは青すぎないか

ネオンサイン あまり冷しもゆる火は友のほほをもてまた消ゆるものを

あの月の眉 持つ をみな これしたい 死なばよかくもかなしけれども

雨後の林に生ふる草のごと低き町並にビルデング そびゆ

この窓から向ふの窓へ手帛ふり手帛ふりつゝ あそびたいな

暗色の空をいろどりビルデング白きを見れば おの泣かれくる

歌人はなぜ悲しかなしとうめなるも

（たつしたりとまたうめてるよ。）

かなしさに月をなるめ よろとびこもる

× ×

よるひるをたえま船なしにまはるとも ゴンチレーターにみいかたちけぬ。

傷いたろばは傷いたゝまに勝る。

× × × ×

旗立てる門並立ち雪のこる菖蒲本山に陽はゝすゝきぬ

（大正天皇を年祭）

× × × ×

庭園のかきつばに水はゆたゆたけりおもかげびとの影うつしけり

（ヴェルレーヲをおもいて）

巴里市役所の戸籍係が大詩人のヴェルレーヲなりしかなしといはば

職業をはなれしのちのヴェルレーヲいよいよかなしくなりにけり

普仏戰争に敗北のつゞきてヴェルレーヲその重圧に耐へかねしとぞ

× × × ×

年暮れぬ

雲ひとつらの

空のはて

（良え雲第四巻）

了

年年も花咲かせうぞ

れんげさゝ

れんげさゝ水にこぼれを咲けるかや

謹みてツネヲ・冬美に歌ふ

昭和三十九年九月

お礼と云ふ掛けをかねて（傍点文し芙）――山谷丘にものをいふ

（心の奥底になるからなあ）

わたる日の丈山ゐしおしたぐて紅葉意ふ古国ゐに（毒立ち）

わたるゐの影浜くこておとろ（り半ばゆく古き国ゐ（生）

山のひざかけおほろかにきりかおしもみぢおとろめ古のよそひ（生）

芸穂日みし流歳時蹟絶 能府淀南宇秋山紅葉多（五音韻）

こんだけ並べるとわかるのだが、おくはちゃくとあ音と井川宇ゐを並べて五位なので、これは意識ねんしたわけである。吟おくはつうの人ゐうである。リセつハつ歌を出してこつ位のもてもこうこねたのある。だからオリケナリティーをいはれたら止むを得ない。それから僕は井川のちゐ位はさかくんした。

こは「ちんし」西川はしゆくんもいつた答だ。だが、成ちゃ白秋や雅なんか出る。井川はこうて淡泊されたとその故思つたからだ。だから僕はとつかのノートへ井川が俳句のまねの真をといち書いておいたのだが、それを今抜さとない。芭蕉一辺倒で井川はこうて大いに頭解されたと思ふ。だから僕の芭蕉一論なって、芭蕉の型を抜げた位なった。「翠道」にしても。一たい井川の知らないことを僕は一つだけ他の本から見つけたのだから、二ヶ年間は「雑念」は書く加えただけだが）、他々

不安定こわ、くんが中四国僕の友人全雑誌論文は一つの見方だ、だが今ねではあんな見方がやされてないからもぬ方がいいといつたそうだが。

二の論文は芭蕉をたらうかと考へてゐる。

君が往雲茅しを晩よときの気持をおくり「往古の古人」の考位からもつている。（独歩だけは別）それでおりは秋五今語十五年紅歌をもて、往古人を知歌はどこへゆく？」とふ工つもくと書いた。俳の秋五今語れのせるといつた「人生」はやつぱりそこから出ている。（秋五今の方は前川の模倣だ）

といつてはれるぬかもしれないが、それはおりがわざとそくてしたのだといつておく（ここでとしは語古の工ツセイはかいておいた。）津田俊はおりの「往古人の「婦ろしき理論」のことを少し云つてくれたのだが、それは友達からの刺激がいるとして、その中の二四は今でも尊敬をもつてゐる。感覚とか象徴とか、芭蕉とか、独歩とか、立山とか、そんなものを好べて非常に面白く気だ。この考へ方の気をよつてくれるのは地下位ちである。それから秋五今語十二ヶ月しも出たら僕の「詩」をもつてくれ。これは本当は詩の形をかりた芸術論なんだが――もうおりは人のまねをしようと考へてゐる。ところで僕の芸術論はまね、かもくては新しい傑作が生れないのだ。二ヶ月位で僕はまねをする。二のことをコキトオは「傑作への抵抗」といつた。ヘンゲルソンやベンネットは「辯証法」といふだろう。たとつば一番の川

（中思想の論文は）

「俳句」

田のおねだね。アウラギのおねとした新立だ。おうのカリケナリティを本さんは感動して、こんなものをつめたのか、偉い人だなあ。根俗でないのだからな？。しかしおかげで大感動した。幸くをみとめられた。勿論此は#の十は坊から丁寧な幸くこいたんだ。――二人なことを書いて心おうをあはわかることはましてくれ。これでいい。ちがおれ者の他にそう絶本をもっていないよ。勿論之から左の「弱しい弟」などを作る位階だけはやくまい。おうは「左の弱は夢なこそ」。ちからおうは君が為に弱をやることを私力は進める。こうだと思めなら肥ヤれでしきけ。肥トビきつと進めようと思め。肥ちがおうんの逆をかけとめ桜ん、「君はしきつとい」めにちがいないと思め。これでかしおつトした。君がおうを淋しがってもまいとこしはめていめをは不要だ。「春は芸術論」は「みなのグループ」ではトヤしつけるかがなまいい礼儀だ。しかし、あ立りのこれる弱は代表作ちから抜でし（桜は君な）。知っていたからと思ったのがあなあ。ちのあ立りこをちが「君なうこんなのをどう考くる。（言つまりは自他共に許した代表作である）

「やしだ」

（石走る）見れの上の早苗のやえつる君をなられけるかし（万葉集）

（言つまり不つえにあらで他の自さえつる君をなられけるかし（土佐日記）

（附記）歌は辰巳物語のいのとこうんまと、桜井から初雪へゆく

（全中にある「現花」）初雪ならんと。（君の万葉地図のちあい出れます）

ちがもう偉の根俗時代は終ってある。こちら本当根俗を初める

おいきん、ありがと。

打日さす都少女の宝鏡は肥日りへの上にながさめ（万葉）